青山御流
活花手引種前篇　三

三之巻凡例

○此巻ハ専秋冬の種類をもつて次第をなし次されたる花状の模様に随て例となせハ聊後の工夫の得あるへし

○此冊末にいたつてハなかさし得らるゝ体どもを顕しそれなきさゝる図ハ除て品種をあつくし是を補ふ並に花形の是形を増減の趣意ともかく便宜前巻の例を推して案考あるへし尚其後にわたつては即興の体を水庭のあやとりを記し夫より上に床棚附書院卓等の図を加へ物巻の合は尺の略飾を僅に一二具を記す猶委しきハ別に傳意あり

檜扇ヒアフキ
射干ナリ
烏扇トモ
鳳翼トモ
仙人掌トモ

ひあふき

圖のことくひあふきは根葉ハふし
立てく紬しにも花なりたれと
めくなかくとあしらにさするハ悪し
兼平の志やわらきと

すへふきまくねめくる
葉をあくさくし
左の圖をらんへし

めくさんも村せて
くさきをつくろて出へし葉の長短も同しことなり

額草（ガクサウ）
がくあぢさいとも

ゆつて様替ハ格別違の儀なるハとかく
葉に茎匠ひきさてあしゆつに茎
長さハ大葉ハ除ひて小
葉のこと専もちゆ
ゐしきに

風情写す
にうへく
よ法しめ次
次社事しを
ふへし

ヤツテ
八手
魚ニ霞ハ毒ヲ生ト

如斯大葉をのそひて小葉のことを主
とりしらへて給ちにまへし

蕣
槿花ナリ
藩籬艸トモ
二
砥草
木賊ナリ

水葵
ミツアオヒ
浮蕾ナリ
水葱トモ
雨久花

此だんとく梢と脚とを見るに葉に随一のさし
たとへハ大葉の数ハ梢の葉るあまたに高き葉など
入るることよしまた左りにかさねる数ふるに二段をさかひに
同しふりに葉をあしらひてあしく下に二本を左右に
ふりあくまごし
巻葉あるにいれまいらせ
語るとも へし

檀特草（タン トク サウ）

如此生けて
芭蕉をとんちよくとされるの意となん
推量し

せんのふをてし石竹の形ハちんハ格別ち外るい
水際なるをあく一本つゝまちゝ子葉ハあしく小菊なく
乃くゝ二本も三本も差く葉さき揃ふ様よ
ぎんとをうてまくし　生し左ふさとし

センノウケ
仙翁花

剪刀秋羅ナリ
剪紗花トモ

あくまんとくりつて乃ゆれ
生るし　形ゆるる花を形　形なし

朝顔（アサカホ）
牽牛花ナリ
狗耳草トモ
毒艸ト有

かくんのなひくきく下艸とそゆるゝハ
かみをはりて風情あしく是非をつぞると
なとハちんの形りをとるへし次の圖と
みるへし

をみなへし
きゝやう

ヲミナヘシ
女郎花
敗將ナリ
女蒼芝

かくんそのきをきいとをく保え年
きくやしおもくとぞうけ上下
とくハ御りてまへし同るてま
水際のほくオ工保く生次もらは
之れ同意なり

ちやくそはくしゆはいそくの
はなあしらひをはなさきこれを陰陽と
わけて株をなすことなし次を入へし

紫苑（シヲン）

志ほに
秋のしてくさ

如此陽葉にて茎を抱へて入へし
前後見はからふへし

葭 アシ
蘆也 葦也
アマ子クサ
よし
水あふひ

ホトヽキスサウ
杜鵑草
蔓梅もどき

大葉なるもおくめく境葉がすこゆるハすゐ勢ひ急し
支茎の分ちてなりとも草に来しまる形の葉大ひ
なるハふちともよりて心し跡のこころなるもあるべし
尚左の図とえて

秋海棠（シウカイトウ）
断腸花
瓔珞草（トモ）

おく水際の葉を引立
器の口とおほいなる様に覚べし
茎も一方ハ秋海棠の性とふくろ
打なびけて入るし此外葉の大ひなる
ものもいづれも同意なり

萩ハギ
天竺艸也
鹿鳴草
芳宜艸トモ

梅嫁ムメモドキ
梅賓ハトモ字不祥

あく枝くおり
ひらけてハ乱情深し一本みして
小菊と添へあるハ
いつれ枝の梢をさけ左りへ出きる二の枝を
除き事子元ニ添く一寸余引きあ一種みして入るハ却て意深深る
魚し次の図をみへし
小梅花
茶梅トモ
海紅トモ
あくのこゝろともみさ下の梢をさけおもと添く遣ハ
却て屈伸の間に花情深しこれ亦椿沙羅樹木槿抔
とらえとして茎葉大なる物ハ無此意をふくみて入魚し

枇杷 ビハ
小菊

水仙

水仙葉のたてあつかひさるゝなけれども
かくたわみそくよつて見えざるは
悪し　茶古余りゆるくみてゆふびの趣と
うしなふ故の圖のごとくすべし

水仙　金盞銀臺花ト云
黄玉花トモ
玉蘂花

かくたわみそくなれどもなに茶葉などに
ゆるゆるに生届し葉の扱ひこと
初巻にくはし

水仙花
仙骨トモ

かくつまゆら外るゝど
よしと漂ふ斜漢書
よあり

狗柳 イノコヤナキ
河楊
蒲柳
豕子柳

なんてん
水仙

卅南天一株ハよききる枝たつへるを
梢ぎわより元ひろきたる枝　ゆへのきみえひわかれ
ながめ薄し低き枝をきり根の曲りをみせひて
さんま添へ留し梢の實もまきもてわり二ふさ計を
残し余をさるべし水仙を禁曲る事却ていやし次をさるべし

南天燭
南天竹
蘭天竹トモ
凡八名有

如斯ひきくゝへ水仙の葉を
一方をまきて一才ハまさまきて曲し

水僊
スイセン
如斯
水仙の葉曲あるを賞すれども多く葉ごとに
こまかくあるハ結しいつれも形ほまもされつゝ
まてよし 澤の図とも見へし

此蝋梅より以下ハ専く連し得たる花而已と圖し顕也
ゆへに四季の順もいとハず只花形の大小に随て二瓶
あるひ三瓶も寄せて風体をとり合せたるなれバたのめとは
に昂興の趣を添らぬ事は紛採繪あしらひ棚附書院
の趣をいさゝか圖し置る所なり

蝋梅（ラウバイ）
寒梅 同
蘭梅
黄梅 同

水仙

櫻草（サクラサウ）

梨花（ナシ）
快栗氏

大手まり
繍毬花
雪毬花
氏

あやめ
紫羅襴花
渓蓀
氏

夏椿 ナツツハキ
沙羅雙樹
堅国樹 同

撫子 ナテシコ
とこなつとも
瞿麦
洛陽花
石竹
南天竺艸 同

雞頭花（ケイトウゲ）
とさか草とも
雞冠花 仝

槖吾（つハ）
山ふきとも
杜衡 仝

美容柳（びようやなぎ）
金絲桃ナリ

長春花（チヤウシユン）
日季茎
薔薇ノ類ナリ

仙蓼(せんりやう) 珊瑚ナリ

猿猴杉(エンカフスギ)

山茱萸(サンシユユ) さんくみよ

烏兜(とりかぶと) 毒艸ナリ

烏頭ナリ 雙鸞菊 正

海老根草(えびね)

他倫草ナリ

鈴根艸 正

水引艸（みつひきさう）
海根ナリ

鴨跖草也（つきくさ）
碧蟬花（さくくさ）
つゆくさ とも

ふとゐ

小刀留

かく平瓶なと浮物ニむくりと出来かたき時ハふといをもつて茎葉のやう
うき物ハ図のことくこより結ひ小柄笄けさんなとの外へ結ひ付をりて入るへし
又木艸共ニ茎のかたき物ハ下を図のことく根を三ツまたは四ツニも割て杉なとを
入れ右なとの仕方ハ時の作意ニ而
生様つくへ活花の本意にハあらさる也
此外にも杉を留口へぬりて
平挿なとに入るも有之女子
児童を慰むもの
与のミ

おさへ 壓留

まいなす
玫瑰花也
薔薇ノ一種ナリ

閩河骨（とうかうほね）

鎖留

牡若

蟹（かに）留

閩のぬく根をきりて
いくつもまとひおきく
り添を抽を入べし
蟹をとめハつめ虫をかゆる
も有又茎をはさみて
とむるも有
手抽く小
准へし

水仙

紫蘭（しらん）
白及草
連及トモ

鋏留ハなかへ出る
趣そふ考となるへし

砂利とゞめハ小砂利
を高くもりて其根
をとゞむべし
石とめハ某和泉なる
中石を五つ六つよせ
て根を押へし

菊（キク）

おくらくおもてとも
あさきくれち

軸前の花
ふねみて

芭蕉（ハシャウ）

甘蕉 尼

偕うとんけとも

繪前の
花形
ふ渇有

紅黄草(カウワウサウ)
藤菊トモ

卓下花
心得有

木蓮花(モクレンゲ)
木蘭モ

三角藺サンカク井
江茎ナリ
七島